

歸還

その頃の戦局は

一九四五年（昭和二十年）

十二月 一日 陸軍省・海軍省廃止。

六日 GHQ、近衛文麿・木戸幸一・大河内正敏・
緒方竹虎等九人に逮捕命令。

一九四六（昭和二十一年）

一月 一日 人間天皇宣言。

四日 GHQ、軍国主義者の公職追放・超国家主
義団体の解散を指令。

十五日 「復員だより」放送開始。

二十九日 GHQ、奄美大島を含む琉球列島・小笠原
諸島等に対し、日本の行政権を停止する覚
書交付。

二月 十一日 占領軍の食糧放出開始。

三月 六日 政府、憲法改正草案要綱発表。主権在民・
象徴天皇・戦争放棄。

四月二十二日 米軍、琉球列島米国軍政府下に沖縄中央政
府（のち民政府）設立。

五月 三日 極東国際軍事裁判開廷。

十一月 三日 日本国憲法公布。

十二月 五日 樺太引揚第一船、函館入港。

八日 シベリア引揚第一船、舞鶴入港。

帰還船

一九四五年(昭和二十年)十二月三十一日の朝、徴用工員たちの捕虜がいるNo.1の約三百人が何台ものトラックに分乗して、砂埃りを高く巻き上げてフェザーストーン捕虜収容所を出発した。

私のいるNo.2の約三百人も、トラックですぐ後に続いた。

鉄条網の金網越しに外側から収容所を見る風景はちがっていた。空地にわれわれの作らした草花が風に揺れて、別れを惜しんでくれるかのようだったが、主のいなくなった小屋は抜け殻のようで殺風景に見えた。

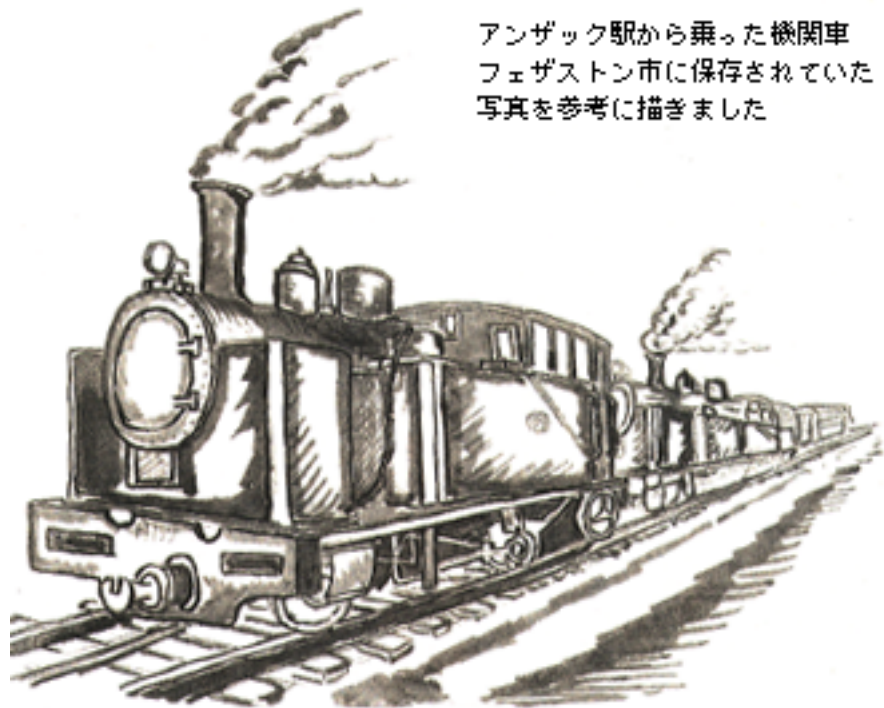
遠ざかる収容所を眺めながら、不思議とうれしさも喜びも何も込み上げてこなかった。初めはあんな大事件を起こした収容所生活が、住めば都のたとえで、しだいに境遇や環境になれ、平和で、安穩過ぎていたからかもしれない。むしろ、この反動がいつくるのか、必ずしも日本へ帰れるとは限らない、フィリピンへ降ろされ強制労働をさせられるのではないかなど、いろんな噂が飛び交い不安になっていたせいかもしれない。みんなすこしも嬉しそうな顔をしていない、誰もがぶすつとして、何もしゃべらず、ただ黙々とトラックに揺られていた。

アンザック駅には客車が待つていた。オークランドからウェリントン間を一日に一往復する途中駅である。以前、チーズを積んだ貨車の荷下ろしをさせられ、同室だった原さんは釘で袋へ穴を開け、今日はチーズを一杯食っちゃったといいつてわれわれを羨ましがらせたところだ。

初めのころ荷下ろし作業をしていると、遊んでいる子供たちや、道行く街の人々がわれわれに手を振ってくれた所もあった。

次回第三十四回は七月二十七日(火)の予定

アンザック駅から乗った機関車
フェザストン市に保存されていた
写真を参考に描きました



hmv